



中南米各国の民族楽器アルパの展示

月には「斑尾国際音楽村ライブ」の会場として提供した。今後、こうした機会をとらえて普及活動を広げていきたいと思っている。最近、少しずつ、講演や教室開催の声がかかるようになってきたのは嬉しいことだ。そういう意味で、自分のやっていることは価値があるのではないかと考えている。また、日本にはハープ専門書はない。いつか本にすることも検討したいという。

坂田さんは話がひととおり終わると、部屋の片隅に置かれたハープの前に座り、突然、奏ではじめた。取材中は、「ブラジル時代に習ったことは、すっかり忘れてしまいました。今では聴く方が好き」と話していたが、やはり若いころに身につけた素養は隠しようがない。

い。部屋いっぱい、まさに玉を転がすようなハープの音色が響き渡った。それは確かに心癒される

穏やかなひととき。猛烈サラリーマンでもあった坂田さんが、ハープの音色に魅了されたわけが、ち

よつとだけ分かるような気がした。
■ 紫音ハープミュージアム
<http://sionharp.nadarackougen.com/>

仕事は完全燃焼、CO₂は出してない

坂田さんは60歳できっぱりと定年退職をした。残ることも勧められたが、その気はありませんと断った。そのときの言葉は、「私は完全燃焼しました、不完全燃焼ならやりませんが、CO₂は出しておりません」。ハープ自体はライフワークで、定年になって始めたわけではないが、ハープという恋人があつてよかつたと思っている。

定年で辞めて、後進に道を譲るべきだというのは、本田宗一郎の考えでもあつたという。坂田さんたちは、本田宗一郎と直接接した最後の世代でもある。入社したときに研究所に挨拶に行くと、「大学の卒業証書なんか持っていないも、何の価値があるんだ。そんなもの破り捨ててしまえ。それよりも、これからこの会社で学ぶことのほうがはるかに多い。それが分からないやつは、今すぐ出て行ってくれ」と言われた。でも、「よく見たら、社会の窓」が開いていた（笑）。やはり人の子だなと思つた。

そんな人間味あふれる創始者とのエピソードもたくさんもっている。

当時、今の中国や韓国と同じように、急成長期にあつた日本では、ホンダに限らず多くの企業が世界に進出し、そのための人材を必要としていた。坂田さんが最初にスペインに行ったころは、まだチャイニーズと間違われ、日本人としては認識されない時代だったが、その後、急速に日本製品の品質が向上し、評価も上がった。そういう激動の時代を経験している。

だからこそ、仕事は厳しかった。その代わり、そこで得られた達成感や満足感は生涯忘れることのないものだろう。「会社を辞めてから集まった仲間同士で、われわれが一番いいときに、一番いい仕事を経験したねと、いつも言い合う」そうだ。

坂田さんは、長年の駐在生活で、スペイン



こんな装った装飾のハープもある

語、ポルトガル語、フランス語、英語にはほとんど不自由しない。部下には、「言葉は目的ではなくて、あくまでも手段。だけど、自分の言いたいことが相手に伝わらなければ、仕事の半分もできないよ」とよく言っていたそう。パソコンを使って、日本語の文章で日本とやりとりをする。そして、大過なく任期を終えて、無事帰りましてたという人が多くなっているのではない。現場で鍛えられたビジネスマンらしく、昨今の駐在員にはそんな苦言も呈する。

今回は、日本のビジネスマンが世界中を猛烈な勢いで開拓していた時代のスケールの大きな話もたくさん聞かせてもらった。